

東洋文庫

96

今昔物語集

3

本朝部

平凡社

永積安明
池上洵一 訳

ながづみやすあき

永積安明 明治41年山口県生。東京大学文学部
国文学科卒(昭7)。神戸大学名誉教授。専攻 国
文学。主著『中世文学の成立』(岩波書店),『中
世文学の展望』(東京大学出版会),「現代語訳『宇
治拾遺物語 お伽草子』」(筑摩書房)など。現住
所 逗子市山の根1-7-18 逗子ハイム

いけがみじゆんいち

池上洵一 昭和12年岡山県生。神戸大学文学
部国語国文学科卒(昭35)。静岡女子大学助教授。
専攻 説話文学。主論文「欠文の語るもの」(『文
学』昭和39年1月号),「今昔物語集の説話受容態
度」(『法文論叢』21号)。現住所 静岡市北安東
5-14-4

今昔物語集 3 本朝部 [全6巻]

東洋文庫 96

昭和42年8月10日 初版第1刷発行

昭和48年9月20日 初版第3刷発行



訳 者 永 積 安 明
池 上 洵 一

東京都千代田区四番町4番地

発 行 者 下 中 邦 彦

発行所 郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京29639 株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします
© 株式会社平凡社 1967

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

凡 例

一 本書の口語訳は、原則として意識を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは、現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかったり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語等を補い、または省くなどして意識したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。

一 本文中 により囲まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。

一 () 内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類語（原則として『梅沢本古本説話集』・『宇治拾遺物語』等より以前に成立したと思われるものに限定し、それ以後の説話はとらなかつた）、あるいは確実な史料のある場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠は、それぞれ巻末に注記した。

一 訳文中の人名・地名は原則として原文の表記のままとしたが、() 内に適宜補充して読者の便をはかったところがある。

一 平易な用語に訳しにくい難解な語句は、注記により、それぞれ簡略な説明を加えた。

一 和歌・詩文・経文は、原則として、本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として巻末に示した。

一 各説話の標目は、なるべく、原文の読みくだしに近く、口語訳することにつとめた。

一 口語訳の原本には、岩波版日本古典文学大系本『今昔物語集』の本文を使用した。

一 本書の挿絵は、井沢長秀の享保版『考訂今昔物語』所載のものによった。(井沢本は、はじめて『今昔物語集』を大衆的に紹介したものであるが、本朝部のみの抄本である。)

一 本書の口語訳にあたっては、前記の日本古典文学大系本のほかに、山岸徳平氏による校註日本文学大系本『今昔物語集』の頭注、長野嘗一氏の日本古典全書本『今昔物語』等を参考にした。中でも山田孝雄・同 忠雄・同 英雄・同 俊雄四氏校注の日本古典文学大系本『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、読み方・注解その他にわたって、多大の恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

目次

卷第十七 本朝・仏法

地蔵菩薩の變化に値遇を願う僧の語第一	三
紀用方、地蔵菩薩に仕えまつり利益を蒙る語第二	五
地蔵菩薩、小僧の形に變じて箭を受ける語第三	七
地蔵菩薩を念ずることにより、主に殺される難を遁れる語第四	九
夢の告げにより泥の中より地蔵を掘り出す語第五	一二
地蔵菩薩、火の難に値い自ら堂を出る語第六	一三
地蔵菩薩の教えにより播磨国の清水寺を始める語第七	一四
沙弥蔵念を世に地蔵の變化と称する語第八	一六
僧淨源、地蔵に祈り老母に絹を与える語第九	一七
僧仁康、地蔵を祈念して疫癘の難を遁れる語第十	一九

陸奥国 むつ の女人、地蔵の助けにより活り得る語第二十九	三
下野国 しもつけ の僧、地蔵の助けにより死期 しご を知る語第三十	三
説経僧 しやうけん 祥蓮、地蔵の助けにより苦を免れる語第三十一	三
上総守 かづさのからときしげ 時重、法華を書写し地蔵の助けを蒙る語第三十二	三
比叡山 ひのの の僧、虚空蔵 こくうざう の助けにより、智 ち を得る語第三十三	三
弥勒菩薩 みろくはつさつ 、柴の上に化し給う語第三十四	三
弥勒、盗人のために壊 こ たれて叫び給う語第三十五	三
文殊 もんじゆ 、行基 ぎやうき と生まれて女人の悪を見給う語第三十六	三
行基菩薩、女人に邪惡の子を教え給う語第三十七	三
律師清範 りうししやうはん を文殊 もんじゆ の化身と知る語第三十八	三
西の石蔵 いしかくら の仙久 せんく を普賢 ふげん の化身と知る語第三十九	三
僧光空 そうくう 、普賢の助けにより命を存える語第四十	三
僧貞遠 じやうえん 、普賢の助けにより難を遁れる語第四十一	三
但馬国の古寺で毘沙門 びしゃもん 、牛頭 ごず の鬼を伏 ふく して僧を助ける語第四十二	三
鞍馬寺に籠もり羅刹鬼 らせつき の難を遁れた僧の語第四十三	三
僧、毘沙門の助けにより黄金を産 う ませて便 たより を得る語第四十四	三
吉祥 きやうじやう 、天女の壺 かめ 像を犯し奉る人の語第四十五	三
王衆 おうしゆ の女、吉祥天に仕えまつり富貴を得る語第四十六	三

生江世経、吉祥天女に仕えまつり富貴を得る語第四十七

妙見菩薩の助けにより盗まれた絹を得る語第四十八

金就優婆塞、執金剛神に修行する語第四十九

元興寺の中門に夜叉、靈験を施す語第五十

卷第十八 諸本欠

卷第十九 本朝・仏法

頭少将良峯宗貞出家の語第一

参河守大江定基出家の語第二

内記慶滋保胤出家の語第三

摂津守源満仲出家の語第四

六の宮の姫君の夫出家の語第五

鴨の雄の、雄の死所に来るを見て出家した人の語第六

丹後守保昌朝臣の郎等、鹿となった母を射て出家の語第七

西の京に鷹を仕う者、夢を見て出家の語第八

若君を傷み、硯を破った侍出家の語第九

春宮の藏人宗正出家の語第十

信濃國の王藤觀音出家の語第十一

鎮西武藏寺で翁出家の語第十二

越前守藤原孝忠の侍出家の語第十三

讃岐國多度郡の五位、法を聞いて直ちに出家の語第十四

公任大納言、出家して長谷に籠居の語第十五

顯基中納言、出家して真言を受け學ぶ語第十六

村上天皇の御子大齋院出家の語第十七

三条太皇太后宮出家の語第十八

東大寺の僧、山に於いて死僧に値う語第十九

大安寺の別当の娘のもとに藏人通う語第二十

仏物の餅で造った酒、蛇と見える語第二十一

寺の別当のもとと麦繩、蛇と成る語第二十二

般若寺の覺緣律師の弟子の僧、師の遺言を信ずる語第二十三

師に代わり太山府君の祭の都状に入る僧の語第二十四

滝口藤原忠兼、実の父の得任を敬う語第二十五

下野公助、父の敦行のために打たれて逃げ行かぬ語第二十六

河の辺に住む僧、洪水に値い子を捨て母を助ける語第二十七

僧蓮円、不^ふ輕^{きよう}の行^{ぎやう}を修^{しゆ}して死母の苦を救^{きう}う語第二十八

山陰中納言に報恩の語第二十九

亀、百濟くだけの僧弘濟ぐさいに報恩の語第三十

高麗こうらいの僧道登どうとうに報恩ほうおんの語第三十一

陸奥国の神、たいらのこれの上平維叙に報恩の語第三十二

東三条の内の神、僧に報恩の語第三十三

比叡ヒキ山ノの天狗、助けた僧に報恩の語第三十四

藥師寺の最勝さいしやうえ会の勅使、盜人を捕える語第三十五

薬師寺の舞人玉手公近、盗人に値い存命の語第三十六

比叡山の大智房の檜皮葺の語第三十七

比叡山の大鐘、風のために吹き転ばされる語第三十八

美濃守の侍の五位、急難を遁れて存命の語第三十九

檢非違使忠明、清水に於いて敵に値い存命の語第四十

清水に参詣の女子、前の谷に落ち入り死なぬ語第四十一

滝蔵の礼堂倒れて数人の人死ぬ語第四十二

貧しい女の捨子を取り養う女の語第四十三

達智門に捨てた子に、犬密オモかに来て乳を飲まず語第四十四

三三

二六

二九

—
—
—
—
—

三六

三八

三九

Figure 1

時間

三六

三

三六

三九

三九

10

三

卷第二十 本朝・仏法

天竺の天狗、海の水の音を聞き本朝に渡来の語第一

震旦しんだんの天狗ちち智羅ようじゆ永寿、本朝に渡来の語第二

天狗、仏と現こぞじ木末えまに坐まします語第三

天狗を祭る僧、内裏に参り現に追われる語第四

仁和寺の成典僧正、尼の天狗に値う語第五

仏眼寺の仁照阿闍梨にんしょうの房ぶどうげんじに天狗託てんこうたくきの女の来る語第六

染殿そめどのの後、天狗のために嬖にやうらん乱せられる語第七

良源僧正、りやう靈と成り觀音院に来て餘慶僧正を伏する語第八

天狗を祭る法師、男にこの術を習わせようとする語第九

陽成院の御代に滝口、金の使こがねに行く語第十

天狗のために取られる語第十一

伊吹山の三修禪師、天狗の迎えを得る語第十二

愛宕護山の聖人、くさいなき野猪に謀られる語第十三

野干、人の形と変じ僧を請じて講師とする語第十四

摂津国の牛を殺した人、放生の力により冥途より還る語第十五

豊前国の膳 広国、冥途に行き帰り来る語第十六

讃岐国の人、冥途に行き還り来る語第十七

讃岐国の女冥途に行き、その魂還つて他の身に付く語第十八
たちばなのいわし
 橋 磐島、使に賂つて冥途に至らぬ語第十九

延興寺の僧惠昧、惡業により牛の身を受ける語第二十

武蔵国のおおとのあまろ赤鷹、惡業により牛の身を受ける語第二十一

紀伊国の名草郡の人、惡業を造り牛の身を受ける語第二十二

比叡山の横川の僧、小さい蛇の身を受ける語第二十三

奈良の馬庭山寺の僧、邪見により蛇の身を受ける語第二十四

古京の人、乞食を打ち現報を感じる語第二十五

白髮部猪鷹、乞食の鉢を破り現報を感じる語第二十六

長屋親王、沙弥を罰ち現報を感じる語第二十七

大和国の人、兎を捕え現報を感じる語第二十八

河内国の人、馬を殺し現報を得る語第二十九

和泉国の人、鳥の卵を食ひ現報を得る語第三十

大和国の人、母への不孝により現報を得る語第三十一

古京の女、母への不孝により現報を感じる語第三十二

吉志火丸、母を殺そうとして現報を得る語第三十三

出雲寺の別当淨覺、父の成った鯰の肉を食おうとし現報を得、

三〇三

三〇六

三〇九

三二三

三二四

三二五

三七

三三〇

三三一

三三三

三三三

三四

三五

三六

三八

三〇

三二

忽ち死ぬ語第三十四

三三

比叡山の僧心懷、嫉妬により現報を感じる語第三十五

三六

河内守、饑食により現報を感じる語第三十六

三六〇

財に耽り、娘が鬼のために噉われたのを後悔の語第三十七

三四

石川の沙弥、悪業を造り現報を得る語第三十八

三四

清滝川の奥の聖人、慢心して後悔の語第三十九

三四

義紹院、知らぬ化人に施を返されて後悔の語第四十

三四九

高市中納言、正直により神を感じしめる語第四十一

三五

女人、心の風流により感應を得て仙と成る語第四十二

三五

勘文により左右の大将愼むべきを、枇杷大臣愼まぬ語第四十三

三五

下毛野敦行、我が門より死人を出す語第四十四

三五

小野篁、情により西三条の大臣を助ける語第四十五

三六

能登守、直しい心により国を息め財を得る語第四十六

三六〇

今
昔
物
語
集
3

本
朝
部

池 永
上 積
洵 安
一 明
訳

卷 第十七 本朝・仏法

地蔵菩薩の變化^{へんげ}に値遇^{こと}を願う僧の語第一

今は昔、西の京のあたりに住む僧がいた。道心があつたので、ねんごろに仏道を修行していたが、その中でも永年にわたり、ことに地蔵菩薩に仕えて、自分はこの現世にある身のまま、生き身の地蔵菩薩にお会いして、必ずその御引導を蒙りたいと願つた。このため諸國を巡り地蔵の靈驗ある所を尋ねて、自分の所願を語るのであつたが、これを聞く人は笑い嘲つて、

「おまえの願いは、まったくばかばかしいものだ。どうして現世にある身のままで、生き身の地蔵にお会いできるはずがあるう」と言う。

それでもなお、僧は年来の所願をあきらめることなく、諸國を経めぐっているうちに、常陸國^{ひたち}（茨城縣）に行きついた。どこともなく歩いていると日が暮れたので、賤しい下人の家に宿を借りた。その家には年老いた婆さん一人と、十五、六歳ばかりの牛飼いの少年がいた。見てみると、人が来てこの少年